

朴花城の長篇『北国の黎明』について

山田佳子

A Study of Park Hwa Sung's *Dawn of the North Country*

Yamada, Yoshiko

1 はじめに

朴花城(1903~1988)は1925年に「秋夕前夜」によって登壇し、植民地期から現代に至るまで韓国を代表する女性作家の一人に数えられてきた。特に植民地期においてはほとんどの女性作家たちが女性の心の内面描写に力を注ぐなか、朴花城は「下水道工事」「洪水前後」「旱鬼」など労働者や小作農民の生活に焦点を当てたりリズム作品を書き、筆致の力強さやスケールの大きさが評価されていた¹。しかし女性作家は女性にしか書けない作品を書くべきだ²という、他の女性作家をも含む文壇全体の雰囲気は朴花城の作品評価を表面的なものにとどめ、朴花城の作品活動についての詳細な研究はこれまでごく一部の研究者の手にのみ委ねられてきたことも事実である。

植民地期の朝鮮の文学者の多くがそうであったように、朴花城もまた日本滞在の経験がある³。そしてその日本滞在中の体験が朴花城の作品形成に大きな影響を与えたことが指摘されている。しかしこれもまた多くの朝鮮の文学者の場合と同じく、日本滞在中の足跡は不明な点が多い。多くの時間が経過した今となっては限られた資料に手がかりを求める以外にないからである。

朴花城は自伝的な作品を比較的多く残している。自伝として書かれたものには「吹雪の銀河」があり、『北国の黎明』や『崖に咲く花』は三人称で書かれた自伝的な性格を持つ小説であ

る⁴。これら以外にも自身の体験を書いた随筆が数多くあり⁵、いずれも朴花城研究の貴重な資料であることは言うまでもない。

本稿で取り上げる『北国の黎明』は自伝的な小説であり、自伝や随筆の内容とは異なる部分が少ない。しかしこの作品は朴花城の作風に変化が見られる1935年に書かれ、その中には朴花城の東京滞在時の様子を知ることのできる内容も含まれている。また完全な自伝ではないというところにむしろ価値がある。ある程度までは事実即して書かれたであろう当時の朴花城の生活の様子をたどりながら、作家の分身として形成された主人公の人物像を通して当時の朴花城の創作に対する考え方を知ることができるからである。

本稿は『北国の黎明』執筆時の朴花城の創作動機を探ることを目的とし、先ず『北国の黎明』の展開を主人公と登場人物との関係に注目しながら追い、次に主人公の性格を分析して人物像を明らかにする。その上で自伝『吹雪の銀河』との大きな違いに着目し、作家の分身と考えられる『北国の黎明』の主人公がどのようにして形成されたのかを考察する。その過程でこれまで明らかにされなかった東京滞在中の出来事についても触れたい。

2 『北国の黎明』の展開

『北国の黎明』は1935年4月1日から12月4日まで全208回にわたり『朝鮮中央日報』に

連載された。連載に先立つ3月22日の予告文の中で朴花城は次のように述べている。

『北国の黎明』という題の下、一人の女性の波乱に満ちた半生をお目にかけようと思えます。私の小説を通して読者は人間の個性を研究し、背景にある社会を理解し、彼らがどんな手段と思いで運命を開拓して理想を達成していくのかを、作家と呼吸と感情をともにしながら見ていくことになるでしょう。そして作家が言おうとしていること、伝えようとしていることが何なのかを理解してもらえらるものと確信します⁶。

朴花城はここで『北国の黎明』が自伝であるとはもちろん語っていない。しかし作品中の出来事の具体的な年月が朴花城の個人的事実とほぼ一致する。ただし後に書かれた自伝や随筆などを読み得ない当時の読者にとっては、これは単に一人の女性、すなわち主人公ヒヨソンの波乱に満ちた半生の物語に過ぎなかったはずである。そこでそのような読者と同じ目線で作品を追う。

作品は前編と後編に分かれている。前編は「入学」「下宿生活」「ベク・ナムヒョク」「告白」「昔の友」「暗闇の花」「初恋」「ソルヒャン」という小題で区切られ、ヒヨソンの母校が3年制から4年制に学制変更したことに伴い、22歳のヒヨソンが改めて母校の4学年に再入学した日から始まる。ヒヨソンのほか、下宿のルームメイトで秀才のヨンスク、以前からの知り合いだったスッキとキョンチェらの女性人物と、ヒヨソンの兄ナムヒョクとその友人ジン、そしてヒヨソンに思いを寄せるヨンシク、ビョンジュ、チャンウらの男性人物が登場する。

女性登場人物のスッキとキョンチェの二人はヒヨソンが母校に再入学する前、各地で教師をしていた時代に知り合った。神童と言われたヒヨソンは15歳で高等科を卒業し、16歳になったら留学させてくれるという父の言葉を信じて教師になった。しかし父が商売に失敗し、結局、教師生活は7年に及んだ。スッキは女性のための夜学での同僚教師であったが、家庭の事情から25歳も年上の男に嫁いでいた。また生徒だっ

たキョンチェはソルヒャンという名で妓生生活を余儀なくされた過去を持っていた。二人ともヒヨンスクより年上だが、新たな人生を求めて遅ればせながらソウルの女学校に正式入学したのである。

男性登場人物うち、早稻田の政経科を卒業したものの「不良鮮人⁷」とみなされて就職に失敗し、帰国した兄のナムヒョクはヒヨソンに政治を教える人物で、既婚者のチャンウをヒヨソンに近付け、指導させた。ヨンシクとビョンジュはヒヨソンの教師時代に英語の講習会の講師を務めた。二人ともヒヨソンに好意を抱いているが、ヨンシクは物語の冒頭で10年後の再会を約束してアメリカに留学する。またジンは就職に失敗したナムヒョクに代わってヒヨソンの学費を援助するなど、ヒヨソンと大きな関わりを持つ人物である。

前編ではヒヨソンの教師時代の回想が多くの部分を占める。その中で注目すべき内容は、若くして教師となったヒヨソンがそれまでの恵まれた生活では知り得なかった人生を送る女性たちに出会い、また生徒たちの置かれた現実を通して地主と小作人の関係を知り、それによって人生観に変化がもたらされたことである。そして「彼らの言いたいことを代弁しよう⁸」と決心する。また、チャンウの教えによって社会変革に対する情熱を持つようになり、「漠然と留学だけを願っていた空想のバール⁹」がはがされる。再び学生となったヒヨソンにはこのような背景がある。

後編は14の小題で区切られ、最初の「カン・ヨンスク」から早々に登場人物たちの恋愛劇が繰り広げられる。自らが秀才でありながら教授夫人になることが夢のヨンスクはヒヨソンに振られたビョンジュと婚約し、ヨンスクに振られた男、チョルスはヒヨソンの同級生スンジョンと婚約する。またチョルスの従妹オクスクがナムヒョクの友人のサンヒョンと婚約する。しかしチョルスとオクスクは肺病のため結婚して間もなく死亡し、それぞれ配偶者を亡くしたスンジョンとサンヒョンが新たに結び付く。儒教に基づく当時の朝鮮の封建的徳徳では認められない¹⁰二人の結合は後の展開に重要な意味を持つてくる。

いずれにせよ恋愛の過程が不明確、というより恋愛自体が存在しているのかどうかも疑問に感じる登場人物たちの安易とも思われる婚約、結婚はかなり唐突な印象を与える。以上のほかにも、スッキは実家の経済的事情から妾となり、キョンチュはヒヨソンの兄ナムヒョクと結婚する。また、ヒヨソンを社会変革に目覚めさせ、既婚者でありながらヒヨソンと相思相愛の仲であったチャンウは溺死する。しかしこれらの設定は主人公ヒヨソンの人物形成について考えるとき、一定の意味を帯びてくる。周囲の人物が様々な形でヒヨソンから次々と離れていくことによってヒヨソンに孤独な闘いが用意される。こうしてヒヨソンは1年間の女学校生活を終え、東京の大学の英文科に留学することになる。

しかし学費を送ってくれるはずだった兄ナムヒョクは同盟ストを煽動した疑いで捕らえられ、ヒヨソンはジンの援助を受けることになる。ジンはもともとヒヨソンの教師時代の同僚であり、その後、東京留学中にナムヒョクとも知り合い、物心両面で二人を助ける。そしてヒヨソンと婚約するものの後に破綻する。後編ではこのジンとヒヨソンの関係、東京でのヒヨソンの活動、そして結婚が軸となる。

ヒヨソンが留学した1926年の夏休み、帰省したヒヨソンにジンが長年の思いを打ち明ける。ヒヨソンはジンの言葉に感激するが明確な返答はしない。年末になりジンはヒヨソンの東京の下宿を訪ねる。そのときヒヨソンは熱を出して寝ており、ジンは看病のために何日かそばに付き添う。そして快復したヒヨソンにジンは再びプロポーズする。このときヒヨソンは同じ部屋で寝たということだけを理由に、ジンのプロポーズを受け入れる。ヒヨソンの性格を表わす場面の一つである。

2学年に進級すると、ヒヨソンは保証人の妻、清水さんの紹介で社会科学研究会の会員になり、毎週日曜日の読書会に欠かさず参加し、熱心に「その方面¹¹⁾」の勉強をするようになる。そのことはヒヨソンにとって誇りであったが、反面、ジンとの婚約を後悔しはじめる。

2学期になると、夫を亡くしたスンジョンが東京に留学することになり、サンヒョンも付き添って上京する。しかしスンジョンの学校生

活に関する場面はなく、その頃からヒヨソンの下宿で開かれるようになっていた朝鮮女性の読書会に参加して活動家として成長していく。サンヒョンは読書会の講師を務める。ヒヨソンは「××団体婦人部¹²⁾」の役員であるという出席者たちの熱い討論の場面に接して実践での経験の重要性に気付く、「それまで英単語ばかり詰まっていた頭が“私も仕事をするのだ”という新しい欲望で満たされていった¹³⁾」。ヒヨソンはまた、「××東京支会¹⁴⁾」の組織に関わり、最高幹部に選ばれる。婚約者のジンはこれに反対するが、ヒヨソンは応じず婚約破棄に至る。

こうしてヒヨソンの傍に残るのは、ともに配偶者を亡くし、道徳的には認められない関係にあるスンジョンとサンヒョン、そして後にヒヨソンの夫となるジュノだけとなる。ジュノはヒヨソンと故郷が近く、それまでも行き来があったという設定だが、このとき初めて早稲田の政治科に在籍中のジュノがヒヨソンを訪ね、1冊のパンフレットを置いて帰る。ジュノは有望な活動家として知られた人物である。そしてヒヨソンの結婚の条件をすべて満たしていた。ジンとの婚約を解消したヒヨソンはジュノのプロポーズに応じる。その頃、サンヒョンは逃亡生活に入った。

ここで場面は一転し、すでに二人の子どもを抱えたヒヨソンが刑務所へ差し入れに通っている。一人目の子どもを出産したヒヨソンが1929年に帰国。翌年、日本での刑期を終えたジュノが帰国し、1931年に二人目の子どもが生まれた。しかしジュノが「××労働組合¹⁵⁾」の組織に関わって再び捕まった、という経緯が回想で語られる。またスンジョンがサンヒョンを追って姿を隠した。

夫の服役によって部屋を借りることに仕事を探すことにも窮したヒヨソンは「メガネのような現代的保護物¹⁶⁾」を外して乳母として働きに出る。しかしヒヨソンの苦勞に報いることなく、1934年、ジュノは転向声明を出して出所する。

その頃、スンジョンとサンヒョンが居場所を知らせ、ヒヨソンにも脱出を求めてきた。ヒヨソンは子どもたちのことを考えて躊躇するが、転向者ジュノの態度に失望し、ついに「憧れの

北方の国」への脱出を決意して故郷を後にする。途中に寄った京城で登場人物たちが一同に会し、10年後の再会を果たしたヨンシクが最後まで引き止めるが、ヒヨソンは決心を変えることなく一人旅立っていく。

以上に見たように、『北国の黎明』はヒヨソンが母校に再入学してからの10年間、すなわち1925年4月から1934年11月までを描いており、数箇所年月日の記述がある。本稿ではこれを手がかりに、作中のいくつかの出来事と作家の個人的な事実とを対照して主人公ヒヨソンの形成過程を探る。この場合、作家の個人的な事実の根拠をどこに求めるかという問題があるが、本稿では自伝『吹雪の銀河』を用い、『北国の黎明』との大きな違いに着目して、主人公ヒヨソンの形成過程を考察し、この作品が書かれた1935年の時点での朴花城の創作動機を探っていく。それに先立ち、次章ではヒヨソンの人物像を明らかにする。

3 ヒヨソンの人物像

『北国の黎明』は一人の知識人女性が教師体験、女学校生活、東京留学、そして恋愛と結婚を経て、革命運動の闘士として踏み出すまでを描いた小説である。ここではヒヨソンの人物像を明らかにするために、ヒヨソンと男性人物の関係に焦点を当てる。というのは、この作品は当時の「進歩的な青年男女の性生活の一面と私生活の一面¹⁷⁾」を見せることが主題の一つであり、ヒヨソンの性格もその恋愛観を通して読み取ることができるからである。

ヒヨソンの心を最初に捕らえたのは既婚者のチャンウである。ヒヨソンは兄ナムヒョクの留学生仲間たちと交流があり、彼らの間で評判が高かった。にもかかわらずよりによって既婚者であるチャンウに惹かれていく。そして叶わぬ愛に苦しむ。ヒヨソンがチャンウに寄せる思いは真の恋心である。チャンウに会う前に「スカートに何か付いていないか¹⁸⁾」と気にする純真さを見せたり、チャンウと自由に会えない悲しみを「結局愛は瞬間の幸福なのだ¹⁹⁾」と表現したりすることなどは、ヒヨソンがチャンウを指導者である以前に男性として愛してしまったことを示している。これに対して、チャンウはヒョ

ソンにクロボトキンの『青年に訴たふ』などの本を渡し、「この中身をヒヨソンさんが理解できたとき二人の愛も解決する²⁰⁾」と話し、「愛の情熱を仕事に捧げる²¹⁾」ように説く。こうしてヒヨソンは社会変革に目覚めるのである。つまり叶わぬ愛を社会変革への情熱に昇華させたわけである。1930年代の女性作家の多くが自由恋愛に目覚めた女性と伝統社会との摩擦を描き、倫理意識によって解決を図ろうとしたなかで、朴花城は社会変革という道標を提示したのである。この場面では一見、チャンウが大人の行動をとってヒヨソンをリードしているように見える。しかし数ヵ月後、チャンウはヒヨソンとジンの関係を疑い、悲観して入水する。ヒヨソンはチャンウの遺志を継ぐことを誓いながらここでまた一回り大きく成長する。結局、愛を断ち切れなかったのはチャンウの方であり、ヒヨソンの強さが際立つ。

ヒヨソンが東京に留学した年の夏休み、帰省したヒヨソンにジンがプロポーズする。ジンはヒヨソンが同僚教師だった9年前から好意を持ち、ヒヨソンの理想に叶うようにと東京で勉強した後、母校で教職を得た。その間、ヒヨソンの長兄(ナムヒョクの兄)を通じて2度求婚し、ヒヨソンもジンの気持ちをわかっていた。そしてジンの抱擁に「驚くと同時に感激²²⁾」もした。ジンとの結婚には何の障壁もない。しかし「まだ結婚とか婚約とかいう問題からは解放されたい²³⁾」と告げ、ナムヒョクが出獄するまで待つてほしいと猶予を求める。ここから読み取れるヒヨソンの結婚観はヒヨソンの友人たちと正反対である。友人たちはいとも簡単に婚約し、しかもその際に何の葛藤もなく、親の介入などもない²⁴⁾。それを自由恋愛の結果の自由婚約と見るならば、ヒヨソンは新教育を受けた女性にしては保守的な性格と言える。ジンを下宿に泊めたことを理由に2度目のプロポーズを受け入れた経緯は先に見たとおりである。

一方でヒヨソンは、ナムヒョクが捕らえられたときに一緒に連行されながら、「同志的な関係は全くない²⁵⁾」と主張して1週間で解放されたジンの思想に疑念を抱いている。そして「自分を愛しているか²⁶⁾」と繰り返し問うジンに対し、ヒヨソンは「そんなことを聞くときではな

い²⁷」と、あくまで愛より同志としての結びつきを上位に置いてジンを説き伏せる。ヒヨスンは一方向的にジンを同志に仕立て上げようとしているかのように見える。そして2学年になり、「読書会」に参加するようになるとジンとの婚約を後悔しはじめる。

ジュノとの出会いはヒヨスンが下宿で朝鮮女性だけの読書会を開き、「××東京支会」の最高幹部になって、最も意識が高まっているときであった。実践行動は時期尚早だと言うジンの忠告など耳にも入らなかった。ヒヨスンにとってジュノは「実践を通じて得た同志であり、全ての面を尊敬できる人²⁸」であった。そしてチャンウとの場合と違って人目が憚られることもないため、二人は「無我の境地²⁹」で愛し合うことができた。男女関係において保守的であったヒヨスは同志ジュノとの出会いによって自由恋愛を達成したのである。そしてこの自由恋愛は愛より活動を上位に置き、自由意思で結び付き、自由意思で別れる同志愛でもあった³⁰。

ジュノが捕まると、ヒヨスは知識人の象徴であるメガネを外し、乳母をしてまで獄中のジュノを支える。しかし転向したジュノにヒヨスは決別を宣言し、「北国の黎明」を受けて旅立つ。このときのヒヨスンに夫婦愛は見られない。夫や子どもよりも活動を優先させる一人の女闘士としての姿を見せるのみである。また、ヒヨスンを「北国」に導くスンジョンの役割にも注目する必要がある。ヒヨスンの同級生であったスンジョンもまた知識人女性であり、正式な結婚が不可能なサンヒヨンの指導によって成長したのち亡命し、はっきりとは描かれていないが、おそらく「北国」で同志として結ばれたものと思われる。

以上に見たようにヒヨスは近代的教育を受けながらも、恋愛に対しては決して開放的ではなかった。しかしよりによって初恋の相手は既婚者であった。ヒヨスは叶わぬ愛を理性の力で社会変革という目標に昇華させ、その意志を貫くことでジュノとの自由恋愛に至った。そして愛と信念の相互作用によってさらに自己を高め、ついには信念がまさって闘士として旅立った。『北国の黎明』を「成長小説に属する長篇」であるとす徐正子は、「最初の近代的女性知

識人の誕生を見せてくれる小説であり、しかもこの知識人の成長を、1920～30年代の最大のイシューと言うべき理念を受容し、実践する過程を通じて提示したという点で注目される³¹」と述べている。

4 ヒヨスンの誕生過程について

『北国の黎明』の予告文において「一人の女性の波乱万丈の半生」を描くと述べた朴花城は、さらに「私たちは物語を通して自己の世界以外の体系と生活を目にするができる³²」とも言っている。ヒヨスは確かに読者の世界の外に存在する理想的人物として描かれた。ヒヨスの周囲にいた人物たちは皆、それぞれの理由で闘争の道から離れていき、困難に打ち克って突き進むヒヨスの強さだけが際立つのである。この作品が自伝的な小説であって自伝でないことは初めに述べたが、朴花城が作り上げた女闘士、ヒヨスンがどのようにして誕生したのかを自伝『吹雪の銀河』と比較して探っていく。ただし、細部における違いの分析は今後に譲り、ここでは『北国の黎明』の創作動機に関連すると思われる大きな違いのみに着目する。

まず、登場人物についてである。自伝にはスッキのモデルと思われる女性が、忘れてはならない人物として登場する。しかしあくまで回想の形で『北国の黎明』と類似する内容が短く紹介されているだけである。そして妓生出身のキョンチェは登場しない。ということは『北国の黎明』においてこの二人の女性を登場させ、過去を詳しく描いたことには特別な意味があるはずである。

スッキの過去については前に簡単に述べたが、一家を没落させた父のせいで25歳も年上の男の後妻に入れられ、「一日だけでも自由の身となって死ぬ³³」ことを願って新たに学校に入ったのであった。もともとソウル出身のため入学後は実家に住み、家族の面倒を見ながら、お姉さん格としてヒヨスンのソウルでの生活も助けていた。またキョンチェの場合は、地位と財産に目がくらんだ母によって両班の妾にさせられるところを恋人と逃げ、その恋人が病死したため死んだつもりで妓生となった。その後、妓生をやめて結婚したが、息子を産めないこと

で虐待されて家を出たのである。キョンチュエに対してヒヨスは過去に姦生をしていたことは自らの過ちでないとは言え決してよいことではないから、これからは「勉強をして立派な人間になり、人々のためになる仕事をする決心で³⁴」励むようにと話していた。

朴花城は不幸な過去を持つこの二人の女性を特別な目的で登場させたように見える。しかし結局、スッキは学費が底をつき、実家に米代も入れることができなくなると自ら妾になる道を選んで家を出てしまう。キョンチュエは卒業の前に自ら退学し、ヒヨスの兄ナムヒョクと結婚する。このときヒヨスは二人の事情を理解しようと努力することもなく、スッキについては「よく思わなくてわざと遠ざけた³⁵」。そして自らの進むべき道を行くのみである。ヒヨスが教師時代に熱心に行ったことは、家にこもっていた女性たちを夜学に通わせ、家の外に出させたことであった。このことからすると、スッキとキョンチュエの成長が曖昧な形で処理されていることには疑問を感じざるを得ない。ただし、朴花城は1935年から1936年にかけて、貧困が女性の生にもたらす桎梏に関心を寄せた³⁶2つの短篇、「重陽の日³⁷」と「温泉場の春³⁸」を発表している。この2つの作品の主人公はスッキやキョンチュエと同じく一家の貧困の犠牲となった女性である。つまり朴花城は『北国の黎明』連載時にこれらの短篇を構想していたことになる。「無産階級の解放なくして女性解放はあり得ない³⁹」と考えていた朴花城は、不完全ながらもヒヨスに女性解放の役割を担わせようとしたことがわかる。

二番目に、自伝とは異なりヒヨスは作家にならない。当初、ヒヨスは教師生活の体験を通して貧しい人々の代弁者になろうと決心する。それは作家になることを意味していたはずである。そしてチャンウとの出会いを経て社会変革に目覚めたヒヨスは、留学への漠然とした憧れを脱ぎ捨てる。このことは留学を止めることではなく、留学の目的がはっきりしたことを意味するであろう。そしてヒヨスは「目白」の英文科に留学する。「目白」とは日本女子大学を指している。英文学を専攻したのはやはり作家を目指してのことであったと解釈できる。

1年後、ヒヨスはメガネをかけるようになった。それは熱心に英文学を勉強した成果であり、「プレゼント⁴⁰」と表現できる自慢の種であった。

2学年になると、ヒヨスは保証人の夫人、清水さんの紹介で社会科学研究会の会員になり読書会に参加するようになったのをきっかけに、ヒヨスの下宿でも朝鮮の女性だけの読書会を開き、それまで英単語ばかり詰まっていた頭に新たな知識が加わっていった。そして「××東京支会」の最高幹部となり、ジュノとの交際が始まる。「××東京支会」とは極友会東京支会⁴¹のことである。この間もヒヨスは仕事と勉強を両立させており、級友との交流が唯一描かれている場面がここである。しかしここではヒヨスが即興で詩を詠んだことに対して、級友たちが「ハクさんはぜったいに理論家で弁論家よ、芸術家じゃないわ」、「鉄や銅みたいに硬くて冷たく見えたハクさんの口から銀糸のようなカナリアの歌が出てくるとはね⁴²」と驚く場面が見られる。このことからヒヨスが勉強以外の活動に力を傾けていた様子がうかがわれる。この後、ジュノとの結婚、出産によって帰国したヒヨスが作家になるのではなく、メガネを外して乳母として働き、闘士となって旅立つ経緯は先に見たとおりである。

ヒヨスが方向転換をするきっかけとなったのは「清水さん」の紹介で出席するようになった読書会である。「清水さん」は自伝では「清家夫人」となっているが、朴花城の入学当時、日本女子大学の社会事業学部女工保全科4年に在籍していた「清家とし⁴³」のことである。夫の清家敏住は1921年4月から1925年3月まで早稲田大学政経学部在籍しており、ここで朴花城の兄と知り合い、朴花城の保証人を引き受けたようである⁴⁴。としは同級の西村桜東洋らと日本女子大学の社会科学研究会を組織し、後に共産党に入党した活動家である。朴花城は清家としから多くの影響を受けたものと推測される。

『北国の黎明』のヒヨスが作家の道へ進まず、闘士となる結末には清家としての生き方が反映されているのではないかと考えられるふしがある。清家としは朴花城と同じく教師の経験が

あり、夫の友人の影響で活動の道に進んだ。朴花城が入学した1926年当時は下宿で研究会を開き、マルクス主義のバイブルと言われた福本和夫の著作を読んでいた。卒業後は労働農民党を経て共産党に入党するが、その間、数度にわたり検束されながらも酷い拷問に耐えて思想を維持した。そのがむしゃらな性格のため「清家のオバサン」と呼ばれていたという。夫もやはり活動家であったが拷問に耐えられず転向し、離婚に至る。これは1931年のことである⁴⁵。朴花城はすでに帰国していたため、そのことを知っていたかどうかはわからない。しかし少なくとも清家としての活動の様子は間近で見ていたものと思われる。ヒヨソンの意志の強さは清家とに通じるものがある。

三番目に、結婚後の展開についてである。自伝では結婚して二人の子どもを出産する間、結局は退学するものの学業を続けるために奮闘する様子が見えるが、『北国の黎明』のヒヨソンは第一子の出産後すぐに帰国し、夫が服役中の家庭を支えるために知識人の衣を脱いで乳母として働きに出る。しかしその甲斐なく夫は転向し、ヒヨソンが闘士となる。ヒヨソンの旅立ちは1934年11月3日のこととなっている。

この結末部分は自伝とはかなり異なる。自伝では刑期を終えて出獄した夫を、朴花城が取り計らって龍井の中学教師として赴任させる。そして1935年、朴花城は一戸建ての家を構えて創作に専念するようになる。4月から『北国の黎明』の連載が始まる。龍井に行った夫はその間に同志を糾合しており、妻子より同志のほうが大切だと告げて離婚を迫る。そして1936年の離婚に至る。

このように自伝によれば、朴花城が『北国の黎明』の連載を始めたとき夫はすでに龍井に発っていたが、実際に離婚に至るのは連載が終わってからである。しかも夫は転向をしていない⁴⁶。したがって実際には結婚状態が続いている時期に、『北国の黎明』では転向を理由にヒヨソンに夫との決別を宣言させたことになる。その時期は1934年11月、すなわち朴花城が創作に専念するようになり、『北国の黎明』の連載が始まる直前という設定である。

このことについては連載中の朴花城と夫との

関係や、朴花城の心境の変化など微妙な問題を考慮する必要があるが、少なくとも朴花城が1934年を一つの区切りとして新たな出発を期したことを示しているとは言えるであろう。『北国の黎明』のヒヨソンはそのような朴花城の決意を担っている。

それではその決意の内容は何か。朴花城の初期の作品は故郷、木浦を舞台としたものが多い⁴⁷。木浦は1897年に開港し、日本の植民地政策の下で急速に発展した新興都市である。作品では労働者や女工の悲惨な生活の描写によって木浦の発展の裏面が描き出され、社会批判的な色彩が濃い。そのような傾向は地主の横暴や自然災害によって小作人が土地を失っていく農村問題を扱った作品にも引き継がれた。

一方、『北国の黎明』連載の直前に「雪降る夜⁴⁸」という私小説風の短篇を発表した。これは教師時代に生徒たちの生活に間近で接して貧富の差の存在を知ったときの体験を描き、最後に「私」の針路はそのとき決まったのだと振り返る内容である。この作品で注目されるのはそれまでの作品が被害者の立場から描かれていたのに対し、教師である「私」の立場、すなわち責任意識を伴った態度で描かれていることである。これ以後、朴花城は検閲の強化にもかかわらず植民地政策への抵抗を露わにした作品を書くようになる。『北国の黎明』のヒヨソンの旅立ちの日が11月3日の明治節に設定されていることもこのことと無関係ではないであろう。

以上のことから1935年は朴花城の作家意識が確立した年であったと見ることができる。作家意識というのは、「一定の人生観と意識の下で文芸を創作し、それを生活としているのが文芸家だ、だから文芸と文芸家を疎かにしてはいけない⁴⁹」、「細々とした筆に火を点して暗黒を照らすのだ⁵⁰」などの言葉を通して読み取れるように、朴花城は作家というものが目標に向かって人々を先導する孤高の存在であると認識していた。『北国の黎明』のヒヨソンはこのような朴花城の作家意識から誕生したのである。

『北国の黎明』は朴花城の作家意識が確固たるものとなった1935年に書かれた。自伝的な要素を持っているが、主人公ヒヨソンは朴花城自身と言うよりは、当時の朴花城の創作に対す

る態度を具現した女性である。ヒョソンの人物形成には朴花城が東京で間近に接していたと思われる清家としからの影響も見られる。清家夫妻との交際が朴花城にとって印象深いものであったことは、二人をモデルにした短篇小説⁵¹を書いたことからもうかがい知ることができる。今後、東京滞在時の様子をさらに明らかにすることにより、朴花城文学への理解が深まるものと思われる。

5 おわりに

朴花城は教師生活をしていた1925年に登壇したが、2作目を発表したのは淑明女学校4学年への再入学と東京留学、結婚、出産を経た1932年である。『北国の黎明』にも書かれているように、作家としての方向性が決まったのは教師時代であるが、それが作品となって現れるまでに7年間の歳月があったのである。年齢では22歳から29歳の時期である。しかしこの間、全く作品を書いていなかったわけではない。1932年に女性初の新聞連載小説として発表される長篇『白花』を書き続け、推敲を重ねていた。『白花』は架空の歴史小説であるが、陰謀によって妓生となった主人公「白花」が数々の困難に打ち克って前途を切り拓いていく物語は『北国の黎明』と通じる部分がある。したがって『白花』の詳細な分析も東京滞在中の朴花城の変化を知る上で欠かせない。いずれにせよ、ヒョソンとは異なり、朴花城が東京滞在中も作家の道を目指していたことは間違いない。

註

- 1 梁柱東「女性文人 片感寸評」『新家庭』1934年2月号、p.36。李宵「女流作品総観」『新家庭』1935年12月号、p.26。
- 2 金文輯「女流作家의 性的帰還論—花城을 論評하든서」『批評文学』、1938年、p.357。安楨南「小説家 朴花城論」『女性』1938年2月号、p.30。
- 3 自伝によれば1926年4月に日本女子大学に入学したが、1928年、学費問題などにより休学。その間に結婚し、ソウルと東京に住む。1930年4月に復学するものの、第2子の妊娠により、その年の秋頃に退学して帰国した。

- 4 「눈보라의 운하 (吹雪の銀河)」『女苑』1963年4月～1964年6月。「北国の黎明(北国の黎明)」『朝鮮中央日報』1935年4月1日～12月4日。「벼랑에 피는 꽃 (崖に咲く花)」『連合新聞』1957年10月15日～1958年5月31日。
- 5 「남기고 싶은 이야기들」(『中央日報』1977年12月1日～30日)、「즐거 선택한 십자가」(『日曜新聞』1979年4月22日～7月30日)、「나의交友録」(『東亞日報』1981年1月5日～2月28日)。以上の3作品は「나의 삶과 문학의 여적」(한라문화、木浦、2005年)にまとめられている。ほかに随想集「순간과 영원 사이」(中央出版公社、1974年、「朴花城文学全集」第20巻所収)がある。
- 6 「新長篇小説予告 北国の黎明」『朝鮮中央日報』1935年3月22日。なお、本稿で引用する朝鮮語文の日本語訳はすべて筆者による。
- 7 朴花城「北国の黎明」、『朴花城文学全集』第2巻、푸른사상사、ソウル、2004年、p.111。以下、「北国の黎明」からの引用はすべて同全集による。
- 8 同上、p.180。
- 9 同上、p.199。
- 10 徐正子「主義者の 성・사랑・결혼」『現代小説研究』第26号(2005.6)、p.101。
- 11 朴花城「北国の黎明」、p.340。
- 12 同上、p.364。
- 13 同上、p.365。
- 14 同上、p.366。
- 15 同上、p.445。
- 16 同上、p.459。
- 17 朴花城「進歩層의 理想과 苦悶을」『三千里』1935年11月号、p.73。
- 18 朴花城「北国の黎明」、p.190。
- 19 同上、p.194。
- 20 同上、p.196。
- 21 同上、p.198。
- 22 同上、p.316。
- 23 同上、p.318。
- 24 徐正子は「この自由婚約の特徴は第一に、親の介入がほとんどないということだ。当事者たちが決定権を持っているのであり、したがって婚約は自由恋愛の結果だ」としている(徐正子、前掲書、p.102)。
- 25 朴花城「北国の黎明」、p.318。

- 26 同上、p.348。
 27 同上、p.349。
 28 同上、p.412。
 29 同上、p.412。
 30 徐正子、前掲書、p.98。
 31 徐正子『韓国近代女性小説研究』、国学資料院、ソウル、1999年、p.82。
 32 「新長篇小説予告 北국의 黎明」(前掲)。
 33 朴花城『北国の黎明』、p.173。なお、スッキは初め、相手の男性が18歳年上だと聞かされて嫌々結婚したのだが、実際には25歳上だった。自伝でスッキのモデルと思われる女性は16歳年上の夫に嫁いでいる。
 34 同上、p.211~212。
 35 同上、p.289。
 36 卞信媛『朴花城小説研究』、国学資料院、ソウル、2001年、p.127。
 37 朴花城『중 국 날』『湖南評論』1935年11月号。
 38 朴花城『温泉場の 봄』『中央』1936年6月号。
 39 朴花城『階級解放이 女性解放』『新女性』1933年2月号、p.21。
 40 朴花城『北国の黎明』、p.338。
 41 植友会は1927年5月に新幹会の姉妹団体として結成された女性運動団体で、キリスト教系女性運動と社会主義女性運動の統一を標榜した。
 42 朴花城『北国の黎明』、p.420。ヒョソンの姓は「白」である。
 43 1943年に再婚して寺尾姓となる(『日本女子大学学園事典』2001年、p.218)。
 44 朴花城『日本女大 入学』、『나의 삶과 문학의 여적』(前掲)、p.223。
 45 以上、寺尾とし『伝説の時代』(未来社、1960年)参照。なお、としの1学年上には黄信徳、朴順天、李賢卿がいた。
 46 朴花城の夫、金国鎭の娘の証言(2003年9月)によれば、金国鎭は北朝鮮で高位の公職に就いていたという(徐正子『朴花城의 『北국의 黎明』 읽기』、『朴花城文学全集』第2巻、p.503)。
 47 拙稿『朴花城の植民地期の作品と舞台について』(『朝鮮学報』第201輯、2006.10)参照。
 48 朴花城『눈 오던 그 밤』『新家庭』1935年1~3月号。
 49 朴花城『教育家들에게 敢히 물을 마 있다』『朝鮮中央日報』1935年1月3日。
 50 朴花城『文人의 年頭誓』『東亜日報』1935年1月4日。
 51 朴花城『애 인 과 친 구』『国税』1967年(発行月不明、『朴花城文学全集』第17巻所収)。

[附記]

本研究は、文部科学省の科学研究費補助(基盤研究(B)「植民地期朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究」、代表、県立新潟女子短期大学波田野節子)を受けている。